

ネクタイはもっと自由に

設立70周年を記念して、和田匡生東京ネクタイ協同組合理事長と
コピーライター・文筆業歴30年以上の立岡ふじ美さんに「ネクタイ愛」を語っていただいた。



和田匡生

日本ネクタイ組合連合会会長
東京ネクタイ協同組合理事長
成和株式会社代表取締役社長



立岡ふじ美

合同会社リープクリエイション代表
コピーライター・文筆家。インタビュー原稿を得意とし、15,000人以上の実績がある。

日本の流通業界に「父の日」を提唱

和田 東京ネクタイ協同組合は今年設立70周年を迎えました。組合が設立された1948年は、戦後の混乱が落ち着いてきたものの、まだまだ統制があった時代です。そんな中、先人がネクタイ業界を盛り上げようと並組合を立ち上げました。**立岡** どのような活動をしてきたのですか。

和田 1966年に日本の流通業界に「父の日」のイベントを持ち込んだのは日本ネクタイ組合連合会です。先輩たちが7月16日の第三日曜日に父の日という記念日があることを知り、イベントがない6月に日本でも流行らせようと言葉店業界にプレゼンしました。父の日にはネクタイを」というキャンペーンが始まり、ネクタイ売りの場でのイベントが開催されました。やがてネクタイ以外のアイテムにも広がり、イエローロードやベスト・ワイザー賞もつなげていきました。「父の日」といえばネクタイという時代がしばらく続きました。昭和50年頃のネクタイ売りの場は父の日になると長蛇の列ができました。**立岡** 業界で需要を作り出したのですか。

和田 そこからバレンタインデーやクリスマスでのキャンペーンを始めました。1971年には当連合会が10月1日を

「ネクタイの日」と制定しました。**立岡** なぜ10月1日なのでしょう。

和田 一つは贈り物の小山梅吉が国産第一号の蝶ネクタイを作ったのが1884年10月であったことからです。もう一つの理由は衣替えです。秋物への衣替えは、ネクタイシーズンでもありますからね。

業界に吹き荒れたアゲンストの風

立岡 そもそも日本がネクタイをし始めたのはいつからですか。

和田 ネクタイは約300万枚から1800万枚に日本にアメリカから持ち込まれたと言われています。明治から大正、昭和と洋装が増え、いっしょにつれて、ネクタイ業者も増え、いまやネクタイ業界は東京、関西を中心に発展してきましたが、次第に経済の中心が東京になり、戦後統制のもと、東京のネクタイ業者力を台座としていこうと並組合が生まれました。**立岡** 繊維業界は関西出身の企業も多いですね。

和田 高度成長期は物が売れる時代で、ネクタイもよく売れましたが、バブルが崩壊し景気が悪くなった後、ネクタイだけが悪くない、メンズファッション業界は苦戦を強いられるようになった。21世紀になり、IT業界トップがTシャツ姿で登場し、ビジネスシーンでカジュアルなネクタイが認知されるようになってしまいました。当時の環境大臣がクールビズを打ち出したのです。我々組合は固守してフリーネクタイと西定する発言はしていないんですけど、いど期間の短縮を求める意見書を出しました。過去、何回かフリーネクタイをうたう政策は登場しましたが、翌年には立ち消えしてしまいました。しかしクールビズは定着してしまいました。

小沢環境大臣のときに陳情して、環境省のHPからフリーネクタイという表現は削除していただきましたが、6月から9月だったクールビズの期間が東日本大震災をきっかけにスーパークールビズとなり、5月から11月と半年になってしまいました。5月からだともう4月はネクタイを買う必要があまり

なくなってしまう、我々としては大きな打撃になっています。当然父の日のネクタイ売りの場も縮小傾向にあります。

ネクタイは男の個性大切なのはTPO

立岡 私は男性のネクタイ姿が大好きです。今年の夏、男女何人かでとても素敵なレストランに行き、機会があったのですが、ある人はきちんとネクタイをしてきて、ある人ははきまきまネクタイをしてきて、女性としてはネクタイをしてきてくれる、その食事会を大切に思っています。見たんだなと感じ、魅力的に見えます。

和田 昔から当組合が訴えているのはTPOに合わせてネクタイをしてくださいということですね。たとえば通勤途中や内勤時などはネクタイを外していても構わないと思うのです。けれども大事な商談やプレゼンするときなど、ネクタイを締めたほうがいい場面というのはあるわけです。ネクタイは男の個性、自分をアピールするのにもいいアイテムです。色や柄を変えていくことで、相手に与える印象を変えることができるのです。男の化粧とも言えますね。

立岡 ノーマークでレストランに行く女性はいませんものね。私はバレンタインデーにもネクタイのプレゼンをしています。はじめは奥様がいる方に差し上げていいものかとか、好きな色やデザインがなかったらかえって迷惑ではないかと思ったり、直接相手に聞いてみないと。それなら、いつも自分が選ばないような柄や色をいたぐのがかえってありがたいとおっしゃっていただきました。

先日も食事をするときにプレゼントをしたネクタイを着けてきてくださった方がいて、とてもうれしかったですね。

和田 ネクタイは百貨店等ではやはり有力なギフト商品です。サイズがなく、必ず使うものだから何本あっていい。かきほらないから海外旅行等からのお土産にもいいですね。**立岡** 私の父は料理をやっていたので、普段ネクタイはしなかったのですが、会合があるときはきちんとネクタイを締めて出かけて行きました。そんな父の姿を懐かしいなあと思ったことをよく覚えています。父が亡く

東京ネクタイ協同組合のあゆみ

- 1948年8月 東京ネクタイ工業協同組合設立(会員76社)
- 1951年2月 日本ネクタイ組合連合会発足
- 1961年3月 東京ネクタイ会館落成(台東区)
- 1962年4月 東京ネクタイ工業協同組合を東京ネクタイ協同組合に改称
- 1966年6月 当組合連合会が全業界の先陣を切って「父の日」を制定キャンペーンを開始
- 1971年 当連合会が10月1日を「ネクタイの日」に制定10月7日までをネクタイウィークとして宣伝開始
- 1977年 環境庁「ネクタイ無用論」に抗議声明文を提出
- 1984年 日本ネクタイ生産100周年
- 1989年 当連合会がバレンタインデーの宣伝を開始
- 1991年 全国ネクタイ生産5,645万本(過去最高記録)
- 1998年 東京ネクタイ協同組合設立50周年
- 2005年6月 環境省「クールビズ運動」に抗議声明文を提出
- 2006年1月 「クールビズ創意工夫展」を開催
- 2009年6月 「ベスト・ネクタイスト賞」を設定

※「ネクタイスト」は、当組合連合会にて「ネクタイが似合う人」という意味を含めたネーミングです。

なったときは好きだったネクタイを飾りましたし、弟は父の形見のネクタイを大事な仕事の場面でも締めて行くそうです。**和田** 私の会社(成和)ではネクタイのリフォームをしています。職人の手で、幅の広いネクタイを時代に合わせて詰めたり、ほつれた剣先をきれいにしたりして蘇らせているのです。ネクタイを締めているお父さんの姿が思い出に湧いているからこそ、ネクタイも大事に受け継がれるのでしょうね。

ネクタイを締めて気持ちを入れる

和田 ネクタイは「締める」と言いますね。それは「鉢巻を締める」「かんじを締める」と同じように、「さあやるぞ」という気持ちの入った動作だからだと感じます。月曜日の朝に鏡の前でネクタイを締める仕事モードに入りますよね。「勝負ネクタイ」というのもよく聞かれます。このネクタイを締めていくときは契約を交わすとか、ゲン担ぎをする人も多いようです。逆に仕事が終わって飲み屋でネクタイを外すとき、リラックスした気持ちになります。

立岡 私は仕事でいままで約1万5000人にインタビューをしてきましたが、たいてい写真撮影がないインタビューでもネクタイをして合っている方はその取材に真剣に向き合っていました。その姿勢を感じます。どうせ写真はないからいいよね、という人はそれが受け答えや内容に表れている気がしています。それは和田さんがおっしゃるような、ネ

ネクタイを締めるということが気持ちに関係しているのかなと思います。たとえば、プロポーズをするときに「ネクタイはあり得ないですよ。こちらがアツク思うような素敵なネクタイをしている人は、発言や言葉の選び方も素敵です。生きたいと言っている人は大丈夫かもしませんが、その人の姿勢が表れるのがネクタイの選び方だと思つたのです。

和田 男にとって、こんなに使い勝手のいいアイテムはないと思つています。その辺でもご理解いただきたいと思います。わざわざ自分の個性をなくす必要はないと思つています。

立岡 元祖山動物園園長の小菅正夫さんは、いつも動物柄のネクタイをしていたんです。自分でも買っていたんですよ。たぶんあれが、何日本も持っているのか。「これがぼくのキャラクターだから」とおっしゃっています。

和田 我々が一番困るのは一般の方のクールビズノネクタイというイメージが出来上がってしまったことです。なかにはネクタイをしていないというドレスコードを設定している企業も多々あります。当組合としては、No Tie Day(ネクタイなしの日)も自由(No Tie Day)というのを提唱しているんです。最後に、当組合はさまざまな逆境の中、ネクタイを愛する多くの皆さんの力で添えて、設立70周年を迎えることができました。その紙重を借して大変ありがたく感謝申し上げます。